



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

音楽鑑賞授業に関する研究：  
バッハ作曲《フーガト短調》

メタデータ	言語: 出版者: 岐阜大学教育学部 公開日: 2023-12-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲田, 久美子, 岡本, 恭子, 伊藤, 梨乃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000204">http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000204</a>

# 音楽鑑賞授業に関する研究

— バッハ作曲《フーガ短調》 —

## Research for the music appreciation class

— J.S.Bach《Fuga g-moll》—

仲田久美子<sup>1</sup>, 岡本恭子<sup>2</sup>, 伊藤梨乃<sup>3</sup>

NAKADA Kumiko<sup>1</sup>, OKAMOTO Kyoko<sup>2</sup>, ITO Rino<sup>3</sup>

---

[キーワード Keyword]	中学校, 音楽鑑賞, ワークシート, 実演
[所属 Institution]	<sup>1</sup> 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), <sup>2</sup> 岐阜大学教育学部附属小中学校 (Gifu University Faculty of Education Affiliated Compulsory School System (Elementary-Junior High)) <sup>3</sup> 岐阜大学大学院 (Graduate School of Education, Gifu University)

---

[要 旨 Abstract] 本研究は、2022年度後学期に開講した岐阜大学教育学研究科の授業科目「器楽教育の理論と実践（鍵盤楽器）」で行った音楽鑑賞の授業についてまとめたものである。本論の構成については、前半で鑑賞授業実施までの準備や鑑賞教材の教材研究、鑑賞用ワークシート作成過程について述べている。後半では、分析内容を①フーガの特徴が理解できたかどうかについて、②音楽を形づくっている要素を理解できたかどうか、の2つに分けて検証・考察している。ここでは、生徒の中に「一体感」や「まとまり」という言葉を使って記述した生徒がいたことを挙げ、様々な音楽を形づくる要素が組み合わさることでフーガ形式が成り立っていることを見つけたのではないかと推察している。また「推移部」と「転調」の関係について記述した生徒がいた点を挙げ、彼ら自身の力で転調の予兆が感受できたことについて考察している。そして結びでは、6つの反省点を挙げ今後の課題と展望を述べている。

## 1. はじめに

本研究は、岐阜大学附属小中学校の第8学年99名に対して実施した音楽鑑賞の授業についてまとめている。役割分担は、概ね次の通りである。まず、伊藤が作成した授業案や授業用資料を教職大学院の授業内で仲田が確認及び修正し、ピアノ独奏披露のための準備も一緒に行った。そして本研究の共同研究者である岡本が担当している音楽科の授業の場を借りて伊藤が授業にあたり、提出された鑑賞用ワークシートの分析を仲田が行い本論としてまとめた。

岐阜大学教育学研究科の「器楽教育の理論と実践（鍵盤楽器）」の授業では、これまでに身につけてきた演奏技術を更に磨き、自分で決めた課題曲に取り組むことを課題とし、受講生が自ら決めた課題曲について「曲想」と「音楽の構造」の関係を演奏で表現し（実演を用いて鑑賞曲を聴かせる）、それについて音楽的な知識をいかした理由付けができるようにする（授業を実施する）ことを目的としている。同時に、中学校音楽科の目標である『表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。』（中学校学習指導要領第2章第5節音楽より）のために、ピアノによる音楽表現方法を探求し、時代様式を理解して演奏できるように練習を積む、という内容でピアノ実技を習得している。受講生自身で課題曲（音楽鑑賞授業実施の楽曲）を決めるため、鑑賞教材について下調べをし、知識を深め、聴取させたいポイントを的確に示し鑑賞用ワークシートを作成する。同時に、様式や形式、そして構造の関わりについて理解及び研究したうえで適切な音楽表現ができるようになること、更に音楽表現について他者に的確に口頭で伝えることができるようにすること、また、どこに着目して聴かせたいのかを明確にし、鑑賞用ワークシートを作成するために楽曲分析や教材研究を行っていく。

## 2. 鑑賞授業実施までの準備

岐阜大学附属小中学校での音楽鑑賞授業は2023年1月27日に実施された。そこから遡ること約3カ月前の10月初旬から「器楽教育の理論と実践（鍵盤楽器）」の授業が始まり、練習期間を確保するために選曲作業から開始した。教育芸術社の指導書「中学生の音楽」2・3上（指導書）実践編及び研究編、そして公益財団法人音楽鑑賞振興財団の「よくわかる！音楽鑑賞の授業づくり」を参考にし、鑑賞授業時に配布する鑑賞用ワークシートの構成を検討した。それと同時に、実演のためのピアノ実技の練習を積みながら、授業で使用する楽曲解説のためのパワーポイントを作成していった。パワーポイントの構成を考えながら授業案も練ったが、小中学校の授業時間である「50分間」という1回の授業時間に知識を盛り込み過ぎたり、説明が長くなり過ぎたりしたため、最終的に多くの案を削ることにした。

教材研究については、学習指導要領の内容を踏まえて行った。学習指導要領の内容との関連については、主に教育芸術社の研究編（p.91）を参考にした。それらの内容を理解しやすくなるような授業構成を考え、生徒たちが飽きないように、より一層興味関心を持てるような発問を盛り込んだり、パワーポイントに画像を盛り込んだりという工夫を凝らした。また、「よくわかる！音楽鑑賞の授業づくり」（p.30）を参考にしたり、特に、[共通事項]の「ア 音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること。」をもとに熟考したりして教材研究を重ねていった。このようにして、授業構成や題材構想を考えることにほとんどの時間を費やした。鑑賞授業を実施するにあたり、生徒たちの「知識習得の方法」や「曲の良さを他の人に伝える表現力を身に付けて欲しい」という点について考え、ピアノ実技の練習と並行して鑑賞用ワークシートの作成や、鑑賞会で使用するスライド作成や授業構成について検討を重ねた。鑑賞授業実施の日程調整については、附属小中学校の行事や授業の妨げにならないよう充分配慮し、岡本の協力のもと実施日程が決められた。下記に授業実施までの準備の手順をまとめる。

### 【鑑賞授業実施までの準備及び分析と評価】

1. 楽曲を選択し、文献調査を行う（演奏の準備及び授業のための資料作成）。
2. 様式をふまえて的確に楽譜を読む（演奏の準備及び授業のための資料作成）。
3. 様式にあう音楽表現について考え演奏に活かす（演奏の準備）。
4. 楽曲の構成を考えて演奏に活かす（演奏の準備）。
5. 表現方法や構成を具体的に説明する（授業のための資料作成）。
6. 自分の演奏を客観的に聴き、リズム・拍・各種記号・レガート奏法・様式・バランス・調和等を確認する（演奏のための準備）。
7. 聴取のポイントを考え、鑑賞用ワークシートを作成する。
8. 授業実施。生徒に鑑賞用ワークシートを配布し、演奏後に回収する。
9. 回収した鑑賞用ワークシートを確認し評価する。
10. 鑑賞用ワークシートを分析する。

上記の手順で鑑賞授業の準備を整え、実施に至った。バッハ作曲《フーガ短調》はパイプオルガンのために書かれた楽曲であるが、鑑賞授業は音楽室にあるピアノを使用して実施するため、ピアノ独奏用として編曲された楽譜を使用した。

## 3. 《フーガ短調》鑑賞授業の内容

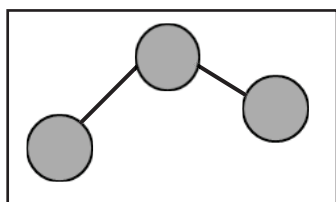
ここからは授業内容と鑑賞授業で実際に使用したパワーポイントの内容を述べる（実際の授業では32枚のパワーポイントのスライドを見せたが、本論では掲載の都合上、ここではパワーポイントのスライドは掲載せず説明に留める）。鑑賞授業の冒頭では、パイプオルガンで演奏された《フーガ短調》をどのような楽器で演奏されているか事前に知らせず、動画ではなく音源を聴かせて「何の楽器の音色でしょうか？」と生徒たちに問いかけた。スライドには生徒が知っていそうな管楽器の画像を提示してあり、「トランペット？

フルート？」と生徒たちに問いかけた。すると、「パイプオルガン」と割とすぐに答えた生徒が多かった。そこで、伊藤はすぐにパイプオルガンの画像を見せた。次に、音源で使用された楽器を映像で示し、生徒達はスライドでパイプオルガンという楽器を確認した。次に、「本時の目標」である「フーガの特徴や音楽の要素と関連付けながら聴き、良さや美しさを味わおう」を全員で確認した。ここから先もパワーポイントのスライドを用いて曲名や作曲者、時代背景、形式、フーガの特徴などを確認していった。それら授業内で生徒たちに見せたパワーポイントのスライドの内容を下記にまとめる。なお、番号は授業構成のために便宜的に振ったものであり、授業で使用したパワーポイントのページ数とは異なる。

### 【授業用パワーポイントの内容及びスライドを見て学習している際の生徒たちの様子について】

- 1.鑑賞曲名を紹介した。
- 2.バッハの肖像画を見せた。パワーポイントの説明には、「なぜかつらを被っていたのか」や、「その頃の日本は…江戸時代！5代将軍・徳川綱吉が生類憐れみの令を出す。裁判の規範を示す、公事方御定書が制定。」という文言を入れ、生徒たちが社会科で学んだことのある日本史の内容と結び付けて時代を把握しやすくする工夫を凝らした。このスライドには関心がある様子を見せた生徒が多く見られた。
- 3.形式についての説明をした。今回は「フーガ」という形式を学ぶことをパワーポイントで提示した。
- 4.《フーガ短調》の冒頭部分についてオルガン演奏の映像を用いて紹介した。授業の初めで一度映像は見ない状態で聴いたが、ここでは演奏している様子や足鍵盤、ストップ、そしてパイプオルガンの全体像を確認した。特に足鍵盤に興味を示す生徒が多かったように見受けられた。
- 5.フーガの特徴を学んだ。フーガの特徴1つ目として、「主題」と「応答」がある、ということを説明した。「主題」はこのような旋律で、「応答」はこのような箇所（旋律）です、のようにピアノで演奏して確認をした。初めて聴く曲でフーガの主題と応答をすぐに理解するのは難しいため、鑑賞中に「ここが主題だよ」「ここが応答だよ」のように曲の途中で先生がコメントを入れないと分かりづらいと感じた。
- 6.主題の最初の3つの音「ソレシ」の音の動き方を確認した。生徒が最も聴取しやすいと予測していた3つの音「ソレシ」の音の並びを視覚化した3つの丸印「●」と、それらをつなぐ線で示した図（下記参照）を見て、生徒たちがその3つの音の動きを手で表せるようなスライドにした。ここでは、音の高低差を体感できるよう、特に3つの音に限定した。それにより、全員が音の高さを意識しながら手で音の高さを示すことができた。

### 【ソレシの音型の図】



- 7.フーガの特徴2つ目では、「転調する」ことに着目させた。最初に「調」という言葉と「転調」という言葉の定義を確認し、その後で「転調とは何か」という説明をした。転調の具体例として、「天空の城ラピュタ」から《君をのせて》という曲を用いて説明した。《君をのせて》及び《フーガ短調》はともに短調で開始され、途中で長調に転調することから、例の提示として《君をのせて》を選曲した。調性が移り変わる箇所を取り出して数回ピアノで演奏することで転調によってどのような感じがするのか、を体感できた様子であった。
- 8.フーガの特徴3つ目では、「保続音がある」ということを説明した。何がどのように保続しているのか、という説明はしたもの、「保続音」という用語自体が生徒たちには馴染みが薄い文言であった

様子であった。この点については「4.生徒たちの反応(1)」で詳しく検証している。

- 9.フーガの特徴4つ目では、「提示部と推移部で構成されている」ということを説明した。説明では、提示部とは「主題が提示されているところ」、推移部とは「提示部と提示部を結ぶ懸け橋のようなもの」と説明したが、こちらも「保続音」と同様に、文言を覚えても何を指しているのか分からないと理解しづらい内容であるように見受けられた。これについても「4.生徒たちの反応(1)」で検証している。
- 10.パイプオルガンについて学んだ。生徒たちに「パイプオルガンを初めて日本に取り入れた人物は？」と発問し、しばらくの間考えてもらった。生徒たちは口々に色々な人物の名前を挙げたが、なかなか正解が出てこなかった。そこで、伊藤が「岐阜に馴染みが深い人物です」というヒントを出すすぐに正解が出た。この時点で正解を確認し、「織田信長が安土に神学校を設置する際に日本で初めてパイプオルガンが取り入れられた。キリスト教を保護・普及することで、貿易を盛んにしようと考え、深く信仰していた。」と説明をした。岐阜という土地柄もあり、織田信長は生徒たちにとって馴染みが深い歴史上の人物でもあるため、深く頷きながら説明を聞く生徒の姿が多く見られた。この発問は、パイプオルガンという楽器がどのように伝来したのか、またキリスト教と深い関わりがある楽器だということを学んでもらうために有効なものだったと言える。生徒の中にはピアノと比較してパイプオルガンの特徴を理解した者や、パイプオルガンの音の出方や音色に興味を持った生徒が多かったようであった。
- 11.パイプオルガンの発音原理について学んだ。「パイプ」に空気を送り込み、振動・共鳴させて音を出す、という知識を学び、「パイプ」には「リード管」と「フルー管」があることも説明した。そして、発音原理の仕組みを図で表示した。授業終了後に鑑賞用ワークシートを回収し、記述に目を通していた際に気が付いたのだが、鑑賞用ワークシートの鑑賞曲についての予備知識を学ぶ穴埋め箇所「フルー管」と書くところに「ブルー管」と書いている生徒がいた。間違っている原因は、もしかしたらパワーポイントのスライドの字が小さすぎて見えづらかった可能性があるのかもしれないと思ったので、今後スライドの字の大きさについて改良を検討する。
- 12.パイプオルガンの音色について学んだ。「ストップ」というつまみを引き出すことで音色を変化させることができる楽器であることを説明した。ここでは「実はあの楽器と似ている！」という問いかけをし、雅楽で使われている「笙」を提示した。生徒たちは「ああ！」と言いながら、雅楽で学んだことを思い出していた様子であった。
- 13.鍵盤について学んだ。パイプオルガンには、手で操作する鍵盤の他、足で操作する鍵盤もある、と説明をした。これはパイプオルガン奏者の演奏動画を鑑賞する際に「足鍵盤」に着目して欲しかったからである。また「足鍵盤」は、パイプオルガンが持つ特徴の1つだからである。
- 14.パイプオルガンの演奏動画を聴いた。鑑賞前に、

- ・主題を見つけたら手で表現してみよう。
- ・雰囲気が変わったことを感じてみよう。
- ・保続音を探してみよう。→どんな感じがするかな。
- ・推移部を探してみよう。

という4つの指示を出してからパイプオルガンの演奏動画を見た。「主題」を見つけることで、「応答」も自然に聴き取ることができるだろうと考えて様子を見ていたが、「主題」と同じ音型であり完全5度上で演奏される「応答」を「音が違う高さで出てくる主題」と思う生徒がいたのではないかと推察した。この点については後程「4.生徒たちの反応(1)」の【聴取の分類】で詳しく述べる。また、「保続音」が響いている箇所で「これが保続音だよ」と伊藤が声掛けしたが、「保続音」と同時に「主題と同じ音型の旋律線」が鳴っていることに戸惑っている様子の生徒が見られた。このことから、いくつかの情報(声部)を一度に聴取(情報処理)するためには、聴く回数が少なすぎたと考えられる。それに加え、多くの覚えたての用語を理解しながら音に集中して聴取するのは簡単なことではないだ



ろうと感じた。また、「推移部」についても同様で、「ここが推移部だよ」と声掛けしても、主題ほどの特徴がないように聴こえたためか、全体的に反応が薄かったように見受けられた。これらについても次の「4.生徒たちの反応（1）」で述べる。

15.パイプオルガンで曲全体を鑑賞した後、伊藤によるピアノ独奏での《フーガ短調》を鑑賞した。ここでは、次のような自由な鑑賞を許可する内容の指示を出した。

- ・音楽の要素、フーガの特徴、その他気づいたこと、感じたことを自由に表現しよう。
- ・文字だけでなく、絵や記号などを用いてもよい。
- ・鑑賞中に動いてもよい。

以上のような流れでバッハ作曲《フーガ短調》の鑑賞授業を行った。全4回に渡る同日の鑑賞授業では、全て同じ資料を用い、同じ構成で実施された。

#### 4.生徒たちの反応（1）

ここまで授業の実施内容について述べてきた。次に、授業内で使用した鑑賞用ワークシートに記述された内容について詳しくみていく。「生徒たちの反応（1）」では分類に準じて述べ、「生徒たちの反応（2）」では筆者が興味深いと感じた生徒の記述をいくつか取り上げて紹介する。分類方法は、回収した99名分の鑑賞用ワークシートについて、「音楽鑑賞授業の学習活動の本日のめあて」である「フーガの特徴や音楽の要素と関連付けながら聴き、良さや美しさを味わおう」に沿って分類し、聴き取りの反応については、次のように分類した。

##### 【聴取の分類】

- ①フーガの特徴が理解できたかどうか
  - a.主題と応答について
  - b.転調について
  - c.保続音について
  - d.提示部と推移部（形式）について
- ②音楽を形づくっている要素を理解できたかどうか
  - a.パイプオルガンの構造や音色について関心を持って聴いたか
  - b.強弱の変化について聴取できたか
  - c.強弱があることを聴取できたか
  - d.音の重なり（テクスチュア）を聴取できたか

上記の分類について99名が《フーガ短調》をどのように聴き取ったのか分析する。分析の方法は、鑑賞授業の「ピアノ演奏を聴く」という活動の中で、鑑賞用ワークシートに記入した自由記述欄（気づいたこと、感じたこと）に書かれたキーワードと内容を精査する、という方法である。各分類項目につき、99名の生徒のうちどのくらいの生徒が理解できているとみられるのか、自由記述欄から読み取り分類した。なお、複数の事柄や要素を聴取した生徒については、聴取した項目にそれぞれ人数を加算して集計した。

まず、①a.「主題と応答」については、38名が聴取した。この①a.「主題と応答」の聴取については、授業の初めに主題の冒頭の3つの音「ソレシ」を手で身体表現したこともあり、主題については聴取しやすかったのではないかと予想する。この38名のうち、数名が「高い音や低い音で主題が聴こえた」と書いていたが、これは高い音が主題で低い音が応答、という意味ではなく、主題の音の形が色々な高さで出現しているように聴こえた、という意味だと解釈した。つまり、「応答」（主題が提示されたあとに他の声部が完全5度上の調性で模倣・応答する）を「主題」と勘違いして理解していた生徒がいたかもしれない、ということである。とはいえ、音楽を専門的に学んでいる環境下とは言えないため、完全5度上で同じ音型の旋律線が聴こ

えたとしてもそれが「応答」だと気が付かないのはやむを得ないと思った。したがって、「主題」は聴き取りやすいが、「応答」は意外と聴き取りづらいこともある、と言えるだろう。

次に、①b.「転調」については、34名が聴取した。①b.「転調」の聴取についても、授業の初めに転調について音で確認したことで全体の三分の一程度の生徒が聴取したものと考える。この「転調」については、「主題」と「応答」の完全5度上の調性へ移り変わることを問うものではなく、変ロ長調の部分へ転調する箇所を想定していた。暗かったものが明るくなったような気がする、と感じた生徒は34名よりも多かったかもしれないが、「転調」とははっきり感受し確信を持つことができた生徒は意外と少なかったようである。

そして①c.「保続音」については14名が聴取した。この①c.「保続音」の聴取については、「保続音と主題」と組み合わせられた記述が見られた。これは恐らく「保続音と主題が同時に鳴っている」という意味ではないかと推察する。また、「保続音があることでより音の重なりが感じられた」や、「保続音があると高音と低音のバランスが良くなる」等の記述も見られた。しかし、99名中14名が保続音に関する記述をしたに留まったということで、保続音を聴取することは難しいということが分かった。

最後に、①d.「提示部と推移部（形式）」については、10名が聴取した。この「提示部と推移部（形式）」の聴取ができていない生徒の記述を見ると、「提示部と推移部」について記述した生徒は他の要素である「転調」、「テクスチュア」、「保続音」、「強弱の変化」等についても記述していることが多かった。このことから、「提示部と推移部（形式）」のような複雑な聴取ができる生徒は、「複数の情報を素早く処理しながら考えをまとめることができる」、「短時間で自分の考えを端的に表現する力が身についている」、「何かと何かを比較しながら考察することができる」というような、音楽科以外でも必要とされる力が身につけているのではないかと推察した。

続いて「②音楽を形づくっている要素を理解できたかどうか」について分析する。まず、②a.「パイプオルガンの構造や音色について関心を持って聴いたか」では、26名が「パイプオルガン」という言葉を用いて記述した。その中には、授業内で紹介されたパイプオルガンの構造について自分の興味関心を記述したり、パイプオルガンはピアノよりも音色のバリエーションが多いという点について記述した者もいた。また、《フーガ短調》を本来の楽器であるパイプオルガンで演奏したほうがその良さが味わえる、と書いた生徒もいた。

そして②b.「強弱の変化について聴取できたか」については、「曲の最初よりも終わりに近づくにつれ音の数が増え、音域が広がり、音楽が広がりをみせ、それにつれ音量が増していく」つまり「変化を聴き取る」という意味で分類している。これについては21名が聴取した。強弱についてももう1つの分類である②c.「強弱があることを聴取できたか」は、「パイプオルガンの音色の違いによって音量が弱めに聞こえ、低音や長い音、また多くの声部が一度に演奏されている時は賑やかに（大きな音に）聞こえる」という意味である。こちらは「音量の変化」ではなく「音の大きさそのもの（変化していく音量ではなく）の違い」について記述したと思われる生徒と分けて考えたため、②b.とは分けた。この②c.「強弱があること」を聴取したのは31名であった。強弱についての2つの分類「音量の変化」と「音の大きさそのもの」を読み取り分類する作業は難しかった。それは、生徒によって様々な言い回しがあったことや、生徒の記述が不十分だったことが要因だろうと思われる。

次に②d.「音の重なり（テクスチュア）を聴取できたか」については、「音が合わさって」や「片手から両手に」という表現も含め34名がこの要素を聴取した。ここでは「低い音と高い音が一緒に聴こえた」という書き方で響きを聴き取ったことを書く生徒が多く見られた。この要素は比較的聴き取りやすかったのではないかと印象を持っている。ここまで分析してきて、生徒の中に「一体感」や「まとまり」という言葉を使って記述した生徒が6名いた。この6名について、筆者は「様々な要素が組み合わさることで初めてフーガという形式が形作られていることに気が付いたのではないかと推察した。どのような記述があったのか、いくつか紹介する。

#### 【一体感、まとまりについての記述】※矢印等の表記も含め原文のまま全文を転記する。

①だんだんはよくなる。だんだん強くなる。だんだん音も大きくなる。推移部があることで一体感があつ

た。はやくなったり強くなるから迫力があつた。弱く、音が小さいところはなめらかに感じた。

- ②強弱がついている。主題と応答がくり返される。⇒だけど、それぞれ雰囲気が違う。高い低いで。速度に変化がある。速いところ⇒迫りくるような感じ。⇒テクスチャがあることからきれいに感じた。パイプオルガンとピアノでは全然音色が違う。⇒パイプオルガンのほうが迫力とかがあつたように感じる。提示部と推移部⇒一つの物語のようなつながり、まとまりがある。転調によるもの。
- ③テクスチャ1つのピアノなのに低い音色と高い音色の重なり 強弱 保続音 ⇒たくさんの音があつたのにまとまっていた。形式（フーガ）主題と応答があつた 保続音と主題 主題は明るいかんじだったけれど、応答では少しくらい感じ ふんいきが出ていてめっちゃ深くなっている。
- ④1つのピアノなのにたくさんの音がかさなりあっている。音の強弱がある。主題がたくさんの音の低さ、高さ、はやさでつかわれている。同じ曲でもパイプオルガンとは強弱や音色も全然ちがう。強い感じとやわらかい感じが同時に。迫力があつた。たくさんの音がかさなりあっているのに1つにまとまっている。
- ⑤高い音色がたくさんある⇒力強い 明→暗→明のリズムになっている。速い。主題と応答があつた。強弱が変わつた⇒転調、保続音がある、⇒一体感を感じた。きれい。
- ⑥リズムがゆっくり←最初 だんだん強くなっている（音が） 速度が速くなっている 大きくなっている 最後のほうにかけて明るくなっている。 暗い→明るい 高音、低音⇒1つにまとまっている

上記の6名について補足すると、①の生徒が書いた「だんだんはやくなる」というのは、伊藤のピアノ演奏が終盤に近づくにつれ勢いが増して聴こえてきたことから速まって聴こえたという意味だろうと推察する。この生徒以外にも多数同じ意見が書かれていたことから、実演で鑑賞させる場合は、微細なテンポの変化にも反応することを想定してテンポ設定を考える必要がありそうである。逆に言えば、実演ならではの熱気が聴き手の理解を深める一助となる可能性もあるだろう。また、②の生徒が「速度に変化がある」と書いたことも①の生徒と同じ理由だと推察する。③の生徒の記述からは「主題」と「応答」を正しく理解して聴取していたと判断できる。④の生徒については、「主題がたくさんの音の低さ、高さ、はやさでつかわれている」と書いてあり内容が不可解な点もあるが、恐らくこの生徒も①と同じ理由で速さが変化していることについて記述したと考えられ、冒頭の主題よりも終盤の主題のほうが速いテンポで演奏されていると感じた可能性がある。⑤の生徒が表現しているリズムという言葉は「パターン」を意味していると思われる。⑥の生徒についても①と同様の理由があると受け取れる。この6名に関しては、「本時の目標：フーガの特徴や音楽の要素と関連付けながら聴き（後略）」が達成できたのではないかと考えてよいだろう。この6名のようにフーガの形式を理解し、様々な要素を一度に聴き取り、それらを組み合わせ、短時間で自分の考えをまとめることができるようになるためには、ある程度の「聴く」という訓練が必要ではないかと推察した。その他、思考・判断・表現等の力の強化について、今回の場合は「文章表現力」や「情報整理の力」も必要であった、ということを確認した。

## 5.生徒たちの反応（2）

次に、「推移部」と「転調」の関係について記述した生徒の記述箇所（全文ではなく、一部を抜粋して転記する）を紹介する。

- ①はじめは、少しくらい感じがする。⇒明るくなる 暗いところから明るいところにつつとときに、推移部でも少しずつ明るくなっている。
- ②推移部で転調？推移部はふわふわした感じ。なごやかなお祈り。
- ③提示部と推移部が交互にあつて、推移部で転調に向けて準備するという形式だった。

これらの3名の記述から、音楽の流れを予測した聴取をしていたと読み取れる。というのは、この日、伊藤が形式の用語を解説する際、「ここから推移部だよ」のように曲の最中で開始場所は伝えたが、特に推移部について詳しく解説したわけではなかった。それにも関わらず、「推移部で転調した」と感受した生徒た



ちがいたということは、彼ら自身の力で転調の予兆が感受できたということではないかと考えられる。ここでは「転調」についての評価基準は、「(転調してから) 転調に気が付くことができた」という聴取でも評価の対象となり得るが、今回、推移部で転調の予兆を聴取できた生徒がいたことに驚かされた。

## 6.反省点と今後の展望

以上の通り、99名の鑑賞用ワークシートの検証を終え、6つの反省点が見つかった。

- ①各内容の時間配分はどうだったか
- ②内容は生徒の実態に合っていたか
- ③資料は適切であったか※用語を間違えて記入していた生徒への対応について
- ④鑑賞用ワークシートに「リズムが早くなる」と記述した生徒への対応について
- ⑤パイプオルガンの曲の鑑賞でピアノ演奏を聴かせる必要性があったかどうかについて
- ⑥生徒同士で意見交換ができなかったこと

まず、①については、学生が単発的に授業を実施する状況下なので解決し難い問題ではあるが、貴重な1回の授業の中に盛り込める要素は限られていたと感じた。伝えたい内容をもう少し絞らないとクラス全体の理解度を高めるのは難しい。半分以上の生徒が達成できそうな課題を設定することや、押さえないポイントに焦点を当てることで、より多くの生徒たちに達成感を感じてもらえるような内容にしたい。これは②に通じることである。目標の設定を段階的に上げることができれば理解度は増すと思うので、可能であれば、授業は2時間に渡り実施し、初回で音楽を形づくっている要素について知識を習得し、2回目で聴取や交流に時間を掛けるというのが理想だと感じた。今回の場合は、主題の冒頭3つの音「ソレシ」は手で音の高さを身体表現したこともあり、半数以上の生徒が「主題はその3つの音で始まる」ということを理解していたと言ってよいが、実際の鑑賞時に数回出現する全ての主題(及び応答)を聴き取れたかどうかについては分からないままである。したがって、ある程度、各要素を掘り下げて聴けるようにするためには、鑑賞前に何かと何かを比較して聴いてみたり、部分的に取り出して立ち止まりながら確認したりしてスモールステップで聴く力を養えるとよいのではないかと思った。回り道なようでも確実な聴く力を身に着けるためには時間を掛ける必要があるということを確認した。これらのことから、②については、鑑賞にかかる時間や内容について、長期的な視点で体系的に考えていきたい。そして③について、特にパワーポイントのスライドは、クラスの理解度や様子、興味関心の度合いによっても変わるが、単純な見間違い(聞き間違い)による理解不足が起きないように配慮することに心がけたい。また、④については、「リズムが早くなる」と記述した生徒がいた点について疑問を感じた。これは言葉の表現の誤りだろうと思うが、生徒は「テンポが速くなるように聴こえた」と書きたかったのか、それとも「拍が細分化されることでリズムの刻みが細かくなったと感じた」と書きたかったのか、それとも別の意味なのか確認できていないままである。「リズムが早くなる」という言い回しが誤りである点については、他の単元を学ぶ際に再確認したほうがよいのではないかと考える。そして⑤については、冒頭でも説明した通り、教職大学院の授業科目「器楽教育の理論と実践(鍵盤楽器)」の授業の課題だったため、ピアノを練習してそれを披露することばかりに目を向けていた傾向がある。今回は、《フーガ短調》の「曲想」と「音楽の構造」の関係を演奏で表現し(実演を用いて鑑賞曲を聴かせる)、それについて音楽的な知識をいかした理由付けができるようにする(授業を実施する)ことを目的としていたが、ピアノ演奏を授業に取り込むことで鑑賞教材の理解が深まるような場合はピアノ演奏が有効であると言えたであろう。しかし、今回のように生徒たちが音楽を形づくっている要素を聴き取ることが難しい場合や、形式をすぐ理解しにくい場合は、どのタイミングで、どのような目的のためにピアノ演奏を取り込めばよかったのかについて、もう少し精査する必要があると反省している。フーガの形式をより深く理解してもらえるようにピアノ演奏を活用する、例えば、《フーガ短調》の転調部分を取り上げ、かみ砕いて説明することが出来ればピアノを利用することが有益であると言えるだろう。したがって、ピアノ演奏を鑑賞授業で使う際は、選曲時にピアノ演奏の活用方法や目的を考えておく必要がある点に留意して、今後、

講義内容を精査していく。最後に⑥については、時間数の関係上難しかったとはいえ、反省点①、②、⑤について振り返り、意見交換の時間も確保できるように工夫し、今後に活かしたい。

## 7. 参考文献等

臼井学ほか編著（2022）『中学校音楽指導スキル大全』明治図書出版株式会社

小原光一ほか監修『中学生の音楽2・3上』指導書研究編（2021）株式会社教育芸術社

小原光一ほか監修『中学生の音楽2・3上』指導書実践編（2021）株式会社教育芸術社

I.PHILIPP Editions DURAND FUGUE en Sol mineur extraite des pieces d'orgue de J.S.BACH transcription de concert pour le piano par I.PHILIPP Professeur au Conservatoire National de Musique à Paris.

藤沢章彦ほか編集（2021）『よくわかる！音楽鑑賞の授業づくり 小学校・中学校』公益財団法人音楽鑑賞振興財団

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 平成29年7月』株式会社東洋館出版社

文部科学省『中学校学習指導要領 第2章 各教科 第5節 音楽』

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youyou/chu/on.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youyou/chu/on.htm) （2023年9月4日最終閲覧）

## 映像資料

藤枝照久（パイプオルガン）「フーガ短調」J.S.バッハ作曲（2021）『よくわかる！音楽鑑賞の授業づくり 小学校・中学校』DVD-ROM収録教材（映像・音源）巻末DVD-ROM、公益財団法人音楽鑑賞振興財団

（受理年月日：2023年9月8日）

